

特集 ● 占領と開拓の〈記憶〉

歴史の裂け目を縫うように

貴司山治「雷新田」論

村田裕和

はじめに

度重なる逮捕・勾留の後に転向したプロレタリア作家貴司山治は、『維新前夜』全七巻（春陽堂書店、一九四一―四四年）に代表される通俗小説を次々と発表する中で、「東亜協同体」の理想実現に自身の作家的使命を託し、そのことによって、危機の時代を乗り越えようとしていた。太平洋戦争開戦後の一九四二（昭和十七）年には小説『青人草』を『報知新聞』に連載したが、これは、国内での農地開拓運動に参加することによって「東亜協同体」への参加を実践しようとする男女の物語である。貴司は、「開拓」を描くことを通して、「転向作家」としての自己のイデオロギー的な立場を表明したのである¹⁾。

『青人草』にとつての「開拓」は、「転向」を声明するための単なる物語的題材だったのではない。むしろ、「開拓」を物語

る行為そのものが、物語に「転向」という実質を充填していった。描かれた「開拓」が、「転向」を代理表象すると同時に、行為遂行的にその意味を実体化させていく。思想的方法論としての〈開拓〉と題材としての「開拓」が、相似的な関係にあるテクスト、それが『青人草』であった。

貴司は一九三七年の警察留置所における不当な長期勾留によつて肉体的に転向を強いられ、一九四一年の妻の死によつて、心身ともに打ちひしがれた。また、旧左翼作家を含む多くの文学者が「徴用」される中で、その選から洩れたことに、作家としての自尊心を大きく傷つけられた。こうした中で貴司は、世界的意義を認識した日本人を指導的立場として日・満・支が協同して西欧資本主義を克服するという「東亜協同体論」に、「日本民族」と共に歩むべき自己の作家的立場を求めたのである。

一九四三年には、当時日本が実質支配していた内蒙古（蒙古自治邦地域への旅行を執行する。帰国後に整理された日記『蒙

『古日記』の出発当日の記録には、「まだ日本の作家がだれも切り拓いてゐない世界——芸術上の仕事のプランを獲得してこないかぎり、私はかへつてこないつもりだ。／どこまでもどこまでも、日本人の一人もゐなくなる最前方までで行くつもりだ。自分の行く場所が蒙古であつても支那の奥地であつても、どこであつてもそれは問ふところではない」（一九四三年九月十五日）⁽²⁾とあつて、旅行によつて作家としての再生の契機をつかもうとしていたことがうかがえる。

また、この蒙古旅行以前（『青人草』の連載終了直後）には、日本文学報国会の企画で新潟県古志郡の山村に出かけて、そこで



図1:「雷新田」公演ポスター

はじめて見た「雷新田」とよばれる棚田の光景とその集落に強く関心を示している。『青人草』で「内地開拓」を題材とした直後であつただけに、「時局」とは無関係に、古代から営々と続けられてきた「開拓」の実践例を見て、大いに我が意を得たとの思いがあつたのだろう。後述するよう

に、いくつかの曲折を経つつも、これを直接の機縁として戦後に発表・上演されたのが戯曲「雷新田」（『テアトロ』一九四九年九月、図1）であつた。

蒙古旅行の後、いよいよ戦局が悪化し、東京吉祥寺の自宅周辺にも空襲が及んできた一九四五年四月、貴司は京都府胡麻郷村に一家を挙げて「入植」し、本物の開拓者となっている。さらに、敗戦後には開拓農民組合の設立にも関わり、京都府の農地委員としても積極的に働いている。一九四九年の「雷新田」は、こうした「開拓者」生活を切り上げて、焼け残った東京の自宅に戻ってから発表された。つまり、「雷新田」の執筆開始と完成は、ちょうど貴司の「開拓」時代の始まりと終わりに重なるのである。そして、この「開拓」なるものが、「転向」と深く結びついたものであつたとすれば、「雷新田」というテキストは、日本のプロレタリア作家にとつての「転向」の意味を明らかにする上でも、重要なテキストであるといわねばならない。

本稿では、「雷新田」における「開拓」の記憶や、その意味の変容・再定義に焦点を当てるとともに、そこに重ねられた作家自身の軌跡もふまえながらテキストの歴史性を考察する。

一 木澤村

「雷新田」は、新潟県古志郡東山村木澤（作中では木澤村／木澤部落）の農民たちの戦中戦後を描いた戯曲である。「雷新田」

とは、この地方の棚田を指す古い言葉で、雷雨だけを頼りに米作りが行われるところからその名称がついたとされる。初出は二幕五場で構成され、一九四九年九月号の演劇雑誌『テアトロ』に掲載された。

初出版のテキストにしたがって、物語を確認しよう。作品の中心人物は、木澤村の「二巻」の「巻頭」である「松倉與兵衛」とその孫の「清一」である。「巻」とは同族集団を表す単位で、村は三軒の「巻頭」が代表する三つの「巻」で構成されている。松倉家は、木澤村にもっとも古くに入植した者の末裔で、現在は地主として小作人を抱えつつ農業を営んでいる。與兵衛の二人の息子はすでに戦死し、長男の子である清一が跡取りで、その下に妹の「はる」がいる。與兵衛の次男にも二人の男児があり、八十三歳の與兵衛は、合計四人の遺児たちを一人で育てていた。第一幕は一九四三(昭和十八)年秋、清一が小作人の「横里国雄」とともに、満蒙開拓青少年義勇軍に参加するために村を出る朝から始まる。「巻頭」を継ぐべき清一が、高齢の祖父と幼い子供(妹・従兄弟)たちを残して村を捨てるということは、松倉家にとつても、「一巻」にとつてもあつてはならないことであつた。しかし一方では、「時局」がそれを要請していた。大叔父(與兵衛の弟)の「石津源吉」は強く反対するが、清一らはそれを押し切つて、満洲に第二の木澤村を築くため、「出征者」と同じ覚悟を持つて村を後にする。

第二幕第一場は戦後、一九四六年である。清一らは満洲で応

召し、今はソ連に抑留されているという情報が村には届いていた。與兵衛は、農地改革に従つて小作地を解放するに際して、「天保池」より下の優良な「古新田」を分け与えると宣言し、源吉はこれに反対する。與兵衛はもはや病篤く、清一の名を呼びつつ亡くなる。

第二幕第二場(一九四八年)では清一が国雄の遺骨を抱いて川口駅に到着、第三場で妹の「はる」や元小作人の若者「武石」らに向かつて、雷新田の開墾を続け、村を共同農場化するという理想を語る。帰国当初の清一は、「満蒙開拓」が他人の土地の略奪にすぎなかったと言い、そうした行為の「つぐない」としてもう一度大陸に渡つて労働奉仕するという希望を語つていたが、物語は雷新田の開墾を引き継ぐことで、與兵衛の遺志を受け継ぎながら、亡くなった国雄を鎮魂する方向へと向かうのである。和製コルホーズともいえるような新たな「村」への生まれ変わりは、「つぐない」の代行なのである。ただし、事の成否は不明のまま、雷新田に沛然と降る夕立の中で、清一の「ぢいさあー」という叫び声が響き、幕が下る。

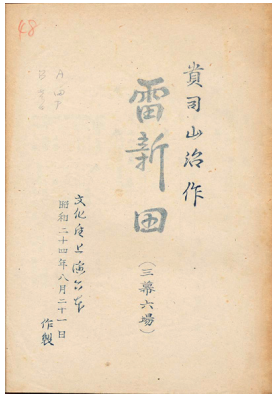


図2:「雷新田」台本

本作は、一九四九年九月十四日(二十七日に、東京日本橋の三越劇場で、

劇団「文化座」の第十二回公演として上演されている。演出は座長の佐々木隆、装置は伊藤薫朔であった。戯曲はこのとき三幕六場に改訂された⁽⁴⁾。

前述の通り、この戯曲は戦時中に実際に木澤村を訪問したことをきっかけとして執筆された。そのあたりのことが、劇場発行のパンフレット「雷新田」(三越芸能部編集、一九四九年九月十四日発行)に収録の、貴司山治「雷新田」余談に次のように記されている。

私はこの時(*一九四二年九月)の木澤村訪問から戯曲「雷新田」を着想したのだけれど、はじめは一幕物として第一幕二場だけを書いた。それを長岡に帰住している松岡譲君のところへ送って、ナマリを訂してもらった。／当時の移動演劇用として発表しようかとも迷ったが、松岡君の忠告で、筐底にかくしてしまった。これが昭和十九年ごろ。／敗戦となつて、私は丹波の山の中で開拓をやっていた。この生活が京都府開拓農民組合運動となり、全国開拓者連盟運動となつて行つた。／はげしいそうした日々の中で、私は又「雷新田」の原稿をとり出して、第二幕を書き、全部で五場とした。「テアトロ」にのせたのがそれである。

(*は村田注、／は改行を示す。以下同じ)

一幕物の「雷新田」(以下、「草稿版」とする)は、方言のチェツ

クを依頼した古志郡出身の作家松岡譲の忠告によって、発表が控えられていたのである。⁽⁵⁾第一幕では、石津源吉が、激しながら「時局」を批判する場面があり、このことが松岡に危惧を抱かせたのではなからうか。戦後になつて、「時局」批判を書き足した可能性も考えられなくはないが、源吉の批判はプロットの根幹と関わるため、大きな変更が行われたとは考えにくい。

貴司の『蒙古日記』の最終日(一九四三年十一月二十四日)には、満洲へ知識人開拓団を送出するプランが記されており、帰国後には移動演劇隊(後述)を内蒙古に創設するための働きかけを蒙古代表部と日本移動演劇連盟に対して行っている(一九四四年五月頃)。「雷新田」草稿版の執筆時期は特定できないが、おそらく満蒙旅行からの帰国後半年ほどの間に、「時局」への積極的な関与を強める中で書かれたものと思われる。ではなぜ「雷新田」がテーマだったのだろうか。木澤村訪問時(一九四二年九月七日)の「日記」には次のような感想が記されている。

冬になると、この村は一丈も二丈もつもる雪の中に埋もれ、川口駅との交通も殆ど杜絶するらしい。村の戸数は八十六、稲作、畑作、養蚕。全戸自作農ばかりかと思つたら、小作人が二十何戸あるといふ。どの家も相当大きくて、富裕な村である。八十六戸が、星野、廣井、間野、小林、平沢、阿部などの姓に分れ、星野姓のものだけが二十何戸も

ある。その内の十二戸を一巻（まき）として、とよさんの家はその一巻の巻頭（まきがしら）である。巻頭といふ古来の自治制をこゝへきてはじめてみる。珍しく思ふ。二時間あまり星野さんの家でいろ／＼とむしろ村のことばかりきいて引きあげ、その村のことを、もっとよくききたいと思つて、今度は国民学校へ行く。

貴司は、「巻」を「古来の自治制」と理解している。現代社会において、「古来の自治制」なるものがそのままに機能していたとは考えにくい。しかし、その遺制ともいふべき山上の集落は、いわば「東亜協同体」の原型（論理を待つまでもない最初の自治共産社会）として貴司の目に映つたものと思われる。したがつて、そうした共同体を題材に選び、戦時下におけるその亀裂や葛藤を描くということは、「日本」の現状を見定めるための思考実験を行うことでもあつた。いいかえれば、木澤村というトポスそれ自身が物語の主題であつた。

二 日本の母

與兵衛の弟・石津源吉によれば、木澤村の歴史は古く、同村の八幡神社の縁起帳には、欽明天皇（在位五三九～五七一年）の時代に神木が切り出された記録があり、その神木を背負つて入植したのが松倉の家だという。源吉が、松倉家の存在をふまえて

「日本の国はこういう山の中の村にいたるまで、古い伝統と制度で下から固めあげられている」と説くとき、そこには、自分たちこそが、記憶の古層をくぐつて本来の「日本」なるものとつながっていることの自覚と自負を表明していたはずである。源吉の「時局」批判は、こうした「古い伝統」の論理の側からなされることになる。

おう、昂奮するとも！ 翼賛会や青年団の役員が、時局をタテに村をこわすならこわすがええ。（中略）無頓着にやれ国策だ、それ共栄圏だと一夜づくりの時局思想で片っぱしからこわして行くのなら、それこそ国をつぶすやり方というもんだこつて。⁽⁶⁾（p.71）

古来の村の伝統に依拠して、「時局」が批判され、村の危機的状況を示すことによって、戦争や国策なるものの矛盾が顕わにされている。このままの文言が草稿版に記されていたとは言い切れないものの、「雷新田」第一幕は、巧みに対抗的な言葉を発する人物を造形したとひとまずはいえるだろう。

この戯曲の元になつた木澤村行きは、日本文学報国会と読売新聞社が提携して企画した「日本の母」というシリーズの取材旅行であつた。戦死した兵士の母親などを各都道府県から一名ずつ、東京のみ二名、樺太から一名の合計四十九名を選び、それぞれ異なる文学者が取材して訪問記に仕立てて顕彰するとい

う企画である。貴司の他、川端康成、高村光太郎などの作家・詩人らが名を連ねている。一九四二年九月から十月にかけて『読売報知新聞』に連載された後、『日本の母』と題して一九四三年四月に春陽堂書店から刊行された。⁷⁾

同書の跋文(中満義親筆)によれば、「聖戦完遂」のために、農山漁村の無名の母を顕彰するとの目的で立案され、「軍人援護会」の協力によって主催者が「銓衡」したのだという。取材された女性の多くは、病や戦争で夫を失って、母一人で多くの子供を育てあげており、しかもその子(場合によっては複数の子供たち)が戦死しても、気丈にふるまい力強く生きている、という姿が描写されている。「大東亜戦争」を戦う兵士を讃えた詩集などとは違い、そこにあるのは夫や息子の死を私的に悼むことさえ許されない母たちの姿であり、文学報国会の文化事業のなかでもとりわけ痛ましい。

たとえば甲賀三郎が取材した樺太の「水本ハマコ」という女性⁸⁾は、「二児を軍隊に送り、軍事扶助さへ辞退して、一人ぼつちで依然として激しい労務に従つて」いる。貴司山治が取材した「星野とよ」もまた、三児を失つてなお「気強」くふるまっている女性であった。

貴司は、靖国神社の例大祭に招かれている「とよ」が身を寄せていた千葉県館山の彼女の三男の家を訪ねて、そこで「とよ」と面会した。彼女が流す涙を見た貴司は、「温い情愛にみちたよき妻であつた」と記すが、「淡々としてその悲しみを口にし

ない」ことには「合点」がいけないと述べている。その後、木澤村を訪ね、彼女の家が「巻頭」であつたことがわかると、「泣かない母」の理由を古代からの族長意識に求め、謎が氷解したかのように「防人の頭なのだ」と記す。親子を古代の「忠臣」になぞらえて讃えることで、貴司は取材記者としての役目を果たそうとしていたのである。しかし、この短い文章のなかで感動の頂点は次のようなところに置かれている。

あゝ、東山村木澤！ 私はこの山の中の越後の村を尊ぶ。村人の先祖代々の努力によつてつくられた米作山村、そこからは今年などは、五百人の村人が食ひあました七百俵の供出米が都会に送られる。越後の一山村が日本を養ふのだ。その上に村からは多くの出征者が出て国の守りについでゐる……⁸⁾

農村が、都市の食糧を、ひいては国家を支えている。その上出征して「国の守り」にもついている。農村こそが国家の礎なのである。「東亜協同体論」に傾斜していたとはいえ、貴司は、都市・国家に搾取され続ける寡黙な農民(農村)の側に立つて、その象徴として「星野とよ」を見ようとしていた。「越後の一山村が日本を養ふ」というレトリックがその証である。しかし同時に、そのレトリカルな発話において、無数の村落と幾万の兵士によつて維持される母胎としての「日本」が立ち上がる。

実は、九月七日に木澤村を訪れた際、「とよ」は留守だった。貴司は彼女に会えなかった。千葉県の子の家に「とよ」を訪ねたのはその後である。記事では、館山で「とよ」を取材した後で木澤村を訪ねたというように再構成されている。(日本の母)という物語を描くにあたって、「とよ」の心理を謎として提示した上で、そこに「族長意識」を代入するという方法が採られたのである。

作家たちには、それぞれが捉えた現実を「あるべき姿」へと脚色／適合させることが求められていた。書き手にそうした身体訓練を施すこと、そのようにして現実加工可能であると思わしめることこそ、『日本の母』のような企画の重要な教育効果だったにちがいない。その際、女性たちの寡黙や沈黙は、テクストにおいて意味を充填すべき空所として機能した。(日本の母)とは、現実が記述・再編され、「東亜協同体論」へと回収されるポイントだったのである。

同様の事態は、「雷新田」でも起こっていた。

戯曲の第一幕第二場で、清一を見送らずに開墾を続ける與兵衛のところへ、新聞記者「天野」とカメラマン「前田」が通りかかる。彼らは、二児を失ったなお孫を満洲に送りだしたという老人の取材にやってきたのであるが、目の前の男がそれだとは気付かず、に会話を交わした後、新聞記者「天野」は次のような解説を加える。

だいたい稲という奴が南は南洋から北は満洲のような寒いところまで、どこにでもつくれる適応性の豊富な植物なんだ。日本の百姓はそれを立体的に利用したんだ。どんなに高い山の上でも切りひらいて、そこを田圃にして稲を植える。平地から高地へ土地を上へ上へと求めて行つて、三千五百萬石を五千萬石にし、六千萬石にして行つたんだよ。実際、古志郡のような山地の農民なんか、同じ越後でも、中蒲原あたりの平原地帯の百姓とくらべて、どんなにわりの悪い労働に服してきたか。しかもこの辺りの農民のだけ一人、有利だからといって平地におりようという者はなかった。みな先祖代々の村を守り、山をひらいて、(中略)三十年間の増産は、みんなこういう山の中のわずかな耕地を切りひらいて行つた百姓の汗のしずくなんだ。(p.173)

この引用の後では、「やれ増産だ、食糧自給だと目の色かえたやうにいつてもらいたくないね。百姓は昔からちゃんとやつてのさ」とまで言う。寡黙な農民の心中を代弁するこの発言は、作品テーマへの自己言及的な語りとなっている。連綿と農業を続けてきた木澤村の(すなわち日本の)農民は、「時局」にかかわらず、はるか以前から食糧増産・食糧自給を実践していたのである。これは、古代からつづく開拓・開墾の努力を救済する言葉であり、あまりにもないがしろにしてきた「百姓」に今さら「増産」を強いる政府への痛烈な批判である。

しかし同時に、「昔からちゃん」と行っていたという批判が有効だとすれば、それは現実を一旦肯定した上でなされるきわどい論理である。なぜなら、「増産」を要請する「時局」そのものは容認され、さらにそれを奨励することへとつながるからである。実際、與兵衛の写真を撮ったカメラマンは、これで「増産コンクール」で一等を取れると喜ぶのである。

批判は協力へ、たやすく滑りこむ。〈日本の母〉と同じポイント(空所)は、ここでは寡黙な〈百姓〉である。この代弁者・天野の発言を「作者」の主張、あるいはテキスト全体のテーマとして理解することもできそうだが、しかしそのことを一旦留保するなら、すべては両義的で、決定不能となる。テキストは、批判と協力の両極へと引き裂かれたままに宙づりされている。あるいはこうも言えるだろう。テキストを宙づり状態へと転化させて批判を脱臼させると同時に、現状の追認へと導く力こそ、〈開拓Ⅱ転向〉の言説力学だったと。

三 移動演劇

前掲の「[雷新田] 余談」には、戯曲を「移動演劇用として発表しようか」と考えていたことが明かされていた。

移動演劇とは、内閣情報局・大政翼賛会の統制下に一九四一年六月に設立された日本移動演劇連盟(委員長岸田国士)が推進した国策宣伝のための巡回演劇運動である。連盟結成に先駆け

て、一九四〇年九月に東宝移動文化隊(図3)、同年十一月に松竹移動演劇隊が結成されている。歌舞伎、新派、新劇を問わず、また弾圧後の左翼演劇人たちの多くもこれにかかわった。

後に「雷新田」文化座公演で舞台装置を担当した伊藤熹朔は、この移動演劇連盟の事務局長を務め、運動に深く関わっていた人物であった。⁽⁹⁾彼の『移動演劇十講』(健文社、一九四二年、図4)によれば、「移動演劇は大都会の芝居を見慣れた観客を対象にしてゐるのではなく農山漁村、工場鉱山等の勤労層に見せることが主な目的」(p.61)で、その脚本は、「楽しみと共に直接啓蒙のよすがとなる主題が要求される」(p.60)とされている。「移動演劇用」を意識していたということは、貴司が、実際に農民たちに見ってもらうことを念頭においていたこと、また、「国策」に沿う主題であると認識していたことを示している。



図3：戦時下の移動演劇の様子(東宝移動文化隊)、『写真週報』182号(1941年)

また一九四二年二



図4：『移動演劇十講』

(装幀伊藤熹朔 1942年)

『大劇場の上演を、一時的にせよ臆病にした』(p.88)とまで書かれている。大当たりだった前年の東京公演が、三好十郎原作の「その人を知らず」で、これは出征を拒否したキリスト者の姿を

月に結成された文化座も、劇団の出発当初から移動演劇にかかわっていた。敗戦時は、満洲演芸協会の招きで新京にあり、帰国したのは一九四六年八月のことであった。⁽¹⁰⁾ 帰国後の文化座は、戦後しばらく存続していた移動演劇連盟の仕事も継続し、また独自に炭鉱地帯などでの巡業も行っている。前掲のパンフレット「雷新田」の中で座長の佐々木隆は、「戦争で、都会が焼けただれ、そこから逃げだした汽車の窓から田舎の農村の風景が美しく緑に輝いているのを見たとき、まことに当然な、しかも公平な、「百年のかたきを一瞬でとられた」ような気がして、正直云つて気持よかつた」(ととりとめもなく)と書いていたが、文化座は、移動演劇を内面化した感性を戦後にまで持ち越した劇団だったのである。開拓者・貴司山治の作品が、伊藤熹朔を迎えて舞台化されたのは、いわば当然の成り行きだった。

通して日本人の罪と過失を問い直すというテーマであった。戦争責任という点では「雷新田」は、「その人を知らず」に通じる部分があり、劇団は二番煎じを狙ったともいえるが、興業不振の要因は複合的であり、必ずしも脚本の罪ではないだろう。⁽¹¹⁾ 同時代評では、『朝日新聞』東京版(一九四九年九月十七日付、朝刊、二頁、署名「井沢」)が、「農地改革の問題を中心に日本農村の封建的な姿を描いた貴司山治の創作劇」と要約しつつ、「くどくて、こなれていない」、「演技の形が古く、動きとセリフが分裂」しているなどと厳しい評価を下していたが、この記事を書いた井沢淳は、『テアトロ』一九四九年十一月号の劇評「文化座と雷新田」では、次のように書いていた。

戦後、満洲から引揚て来たこの劇団は他の新劇団と比べて非常に不利な立場に立っていた。(中略)それにもかゝわらず、この劇団の諸君は断然、自分らの演劇を守ろうと激しい団結に燃えていた。／息^ぎずまるような舞台のセリフのやり取りは、若い新劇団の熱情のほとばしりのようである。体あたりの演劇的修業なのだが、そこに演劇の楽しさが忘れられているようであった。忘れられている——といったところで、それを思うよりもっと切実な演劇的な情熱であつた。

井沢の厳しい評価は、引き揚げ劇団としての文化座が、独自

の道を歩もうと苦闘していることへの理解の上で発せられていたのである。また、『日本演劇』一九四九年十月号の利倉幸一

「文化座雑感『雷新田』評によせて」でも、「文化座は閨歴そのものが戦争中につながつてゐる」とした上で、「この時代」に朴直に生きてゆかうとする態度。これはめづらしい、「愚直な百姓と朴直な文化座。性格が合致した」と指摘されていた。「雷新田」公演は、劇団の将来に期待を抱かせるに十分な芝居だった。

しかし同時にこれらの評は、劇団の反時代性をも示唆している。とりわけ「雷新田」では、満蒙開拓に動員された農民自身の加害意識が問われていた。また、移動演劇に起源をもつ、いふなれば土にまみれた舞台であった。東京の観客たちの中には、敗戦前後の食糧難の中で、郊外の農村に買い出しに出かけて、足下を見られながら衣類を売り払った記憶を持つ者も多くいたはずである。そうしたことが入場者の低迷に直結したかどうかは分からないが、同じような戦争批判・自己反省の舞台であつても、「その人を知らず」に比して「雷新田」はあまりに農村的であり、「百年のかたき」を見せつけるような反都市的舞台だったことは確かである。

「時局」に対する批判と協力の両義性。移動演劇をルーツとする反時代性と反都市性。原作のテクストが戦時下から持ち越されたことと同様に、舞台「雷新田」もまた、戦時下の文化状況からそのままに取り出されたかのようにである。

ところで、戦時期の穀物流通に詳しい大豆生田稔によれば、

戦前期の食糧需給構造は安定的に推移していた。それが急速に崩れるのは、日中戦争の開戦にともなう貿易統制によつて、アメリカ、オーストラリアからの小麦の輸入が途絶したことであつた。日・満・支ブロック圏内での深刻な小麦不足が満洲産の粟の需要を押し上げ、これによつて玉突き式に穀物流通は混乱する。それまで満洲産の粟は朝鮮半島で消費され、それが朝鮮米の日本への移出を担保していたが、その供給がストップしたことで、結果的に日本は「南方」を確保して「外米」を移入せざるを得なくなつたのである。

満洲では戦前期（一九三四―三六年）の平均で、三五・七万トンの米を生産し、四三・八万トンを消費していた。日中開戦後（一九三七―三九年）の平均では、一二万トン増産し、五七・七万トンの生産高であつたが、消費は七五・七万トンと、三二・九万トン増加しているのである。この数字が示すのは、「満蒙開拓」が進むほど米が足りなくなるといふ現象である。これを自給率で表すと、八一・五％から、七六・二％へ、五・三ポイントの減少であつた。満洲に移り住んだ大量の日本人移民と関東軍は、間違いなく米の消費を押し上げ、食糧不足に拍車を掛けたのである。松倉清一らは、何のために、いったい何をしに満洲にまで渡つたのか。そのことがもう一度問い直されねばならない。そして、この反時代的な舞台で観客たちが何を見たのかを確認したい。

四 開拓者の末裔

清一の祖父松倉與兵衛には、「巻頭」としての矜持があった。その源泉は、ひとえに最古参の「開拓者」としての歴史とその自覚に求められる。営々と切り拓かれてきた田圃は、先祖から代々受け渡されてきた遺産であり、そこにいくらかの利子を付け足して次代に贈ることが彼の務めであった。だからこそ、八十を超えてなお「開拓」を率先し、山頂に「雷新田」を切り拓いている。しかし、與兵衛は、「開拓者」としての倫理を徹底的に内面化しているからこそ、孫の清一を止めることはできない。なぜなら清一もまた、同じ「開拓者」倫理に則って行動していたからである。松倉清一は、義勇軍に入隊する際の挨拶で渡満の意気込みを次のように語っていた。

横里君にとつては大陸の新天地へ移任^{マツ}して、新しい第二の村をつくる理想がその宿命でありましょう。ぼくは地主の倅であります。しかし、ぼくは農村に生れたものとして、自分の身に横里君と同様の理想を感じます。木澤の村を救うことは巻頭たる松倉清一の先祖から与えられた義務であります。ぼくは率先して第二の木澤村を、横里君と二人で満洲につくります。(89d)

清一は、大陸に「第二の村」を作ること「先祖から与えら

れた義務」だと述べている。石津源吉は「長男の分際で」(p.63)と清一を非難するが、地主の長男だからこそ、この「出征」は小作人の口減らしなどとは次元の異なる国家的な崇高さに参与することの証明ともなるだろう。清一を迎えに來た助役の「竹澤」は、「国家の要請に挺身して満洲へ出て行く」ことを、「その精神において、その目的において、出征同様である」と語っていた(p.68)。ここにおいて「開拓」は、食糧問題である以上に、倫理の問題としても提示されていたといわねばならない。

前出の白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』によれば、青少年義勇軍は都道府県別に割当があつて、良質の人材を効率的に囲い込む必要から、十五、六歳の高等小学校卒業者をターゲットとして募集活動が行われていた⁽¹³⁾。出願者は農家の次男以下が七割ほどを占めていたとはいへ、戸主・長男も一割ほどあつた⁽¹⁴⁾。さらに、「義勇軍」は「郷土」を単位として編成され、彼らには「郷土の代表者」といった宣伝がなされていた。祖父與兵衛に見送つてもらえない清一が、助役の竹澤に「君は古志郡南部の班長だぜ」(p.67)と非難されていたことと照応するだろう。

石津源吉は、「村の制度をこわし、国の伝統を破つて、何が御奉公じや。清一の時局熱を木澤の歴史にてらしてまともに導いてやってくれるのが、(*青年団代表の)廣瀬さのような知識階級のむしろ責任だこつて」(p.77)と主張していたが、移民送出を手がけた拓務省は、「家族こそが青少年の応募を抑止す

る存在である⁽¹⁵⁾」と判断し、応募勸奨を担う教員を対象にした講習会まで開いていた⁽¹⁶⁾。源吉のような反論はとうに予見され、地域ぐるみで対策されていたのである。

太平洋戦争が開始され、大日向村のような大規模な分村移民が下火になる中、青少年義勇軍は満蒙開拓の主軸となりつつあった。食糧需給は混乱をきたし、対ソ戦を想定した国防備も行わなくてはならない。もはや問題は、内地の余剰人口対策どころではなくなっていたのである。そこでは、父が戦死してもなお郷土の発展を期して渡満しようとする松倉清一のような人物こそが要請されていたはずである。

「雷新田」に悲劇があるとすれば、この清一の一途な情熱と責任感そのものであった。現実には何一つ倫理の問題ではなかったからである。清一が訓練所に入る約半年前、一九四三年三月には、「開拓政策戦時体制促進要綱案」が開拓総局によって示され、「ソ」満国境要線を中心に義勇軍のさらなる補充が目指されていた。清一の「決意」や「理想」は出来合いの言葉に過ぎず、その純粋な郷土愛はすでに何重にも囲い込まれていたのである。

前述のように、開拓者の末裔である松倉家は、村の起源にまで遡る歴史を持ち、その先祖は八幡神社の神木を担いで入植したとされる。八幡神は国家鎮護の神であり、武家の守り神ともされたことから東国征伐の歴史とも縁が深い。大和政権が地方豪族や先住民族を駆逐し、東国を支配／占領したこと証を、

松倉家は神話的伝承とともに「開拓」という営為によって今に伝えていたのである。入植当時の松倉家は、明治期の屯田兵や満蒙開拓における武装開拓団と同様の性質を備えていたはずである。だが、このいにしへの占領の記憶は遠く消え去り、完全にテキストの外部に置かれている。

そのような〈木澤村〉を実験的トポスとして、與兵衛が「開拓者」の倫理を強調し、源吉が伝統的・日本的な共同体の価値を強調していたのである。両者は清一の「満蒙開拓」をめぐる対立したが、実はいずれの主張も元をたどれば、同じ起源へと行き着く。それは、一言でいえば農本主義的な「君臣共治」のイメージに限りなく近い。テキスト中で、くりかえし「加藤先生」と出て来るのがその〈指標〉の一つであろう⁽¹⁷⁾。加藤完治は、満蒙開拓青少年義勇軍の内地における訓練施設であった「内原訓練所」の所長であり、満蒙開拓事業に影響力を及ぼした人物であった。戦時下の山間に幻視された開拓者コミュニケーション〈木澤村〉。テキストは、その実験場に走るいくつもの亀裂を露呈させた。そしてそのことによって、テキストの外にある震源地を指し示そうとする。しかし、あくまでもそれは示唆されるに過ぎない。上記のいくつかの〈指標〉から類推すれば、この初出テキストが次のように改訂されたことは一応納得できる⁽¹⁸⁾。

改訂された台本版では、村の助役竹澤が軍需物資の横流しで捕まり裁判で断罪される噂が伝えられ、青年団代表として清一に「出征者」と同じ覚悟を説いていた廣瀬はきわめて利己的な

人物として描かれている。末端とはいえ、戦前の支配権力の不正や俗悪さが暴露されることで、観客は、村を崩壊に導いた存在が誰であり、それがいかに低劣な本質を持つものであったかを想像することとなる。清一に付与された共產主義的イデオロギーが、そうした「悪」と対置された「正義」であるのも分かりやすい。こうした物語の明瞭化は、実際の舞台を観ている観客たちにプロットを納得させる上でも必要な配慮だっただろう。

だがここにはすでに、戦後何度も再生産されていくこととなる物語の祖型が現れている。その定型的な物語とは、日本を誤らせたのは軍部であり、ファシスト官僚たちであり、彼らの無責任体質であるというものだ。しかし一方、松倉清一が古代からの開拓者／義勇軍の末裔であり、加藤完治が「日本精神」を強調していたことから考えれば、テキストの外部にある震源地は「天皇」なのかもしれない。だとすれば、初出版に対する台本版は、軍人・政治家を断罪し、昭和天皇を免責した極東国際軍事裁判と同じ構造をもつことになる。

しかしはたしてそうなのだろうか。軍部や官僚であれ、天皇であれ、テキストは、そのような外部に対象化されたものとしての「責任の所在」を教えようとしていたのだろうか。とりわけ、明確な悪者も登場せず、「開拓」にこだわる清一の情熱の源も明示されていない初出版のある種の分かりにくさを、台本版の説明は正しく解きほぐしたことになるのだろうか。観客あるいは作者や演出家さえも）が見逃したのは、敗戦を挟んで接合

されたテキスト／舞台の、その落ち着きの悪さ、言語化されない違和感そのものだったといわねばならない。

五 終わりなき「開拓」——まとめにかえて——

筐底に隠されていたテキストは、敗戦によってようやく発表の機会が与えられた。貴司山治は、第二幕・第三幕を書き継いで完成させた。八月十五日は、第一幕と第二幕の間にあって、その接続の処理に無理はない。

完成されたテキスト（初出版・台本版）には二つの読解可能性が示されている。一つは、すでに見てきたとおり「開拓者」としての自負と矜持が、世代を超え、歴史を越えて受け継がれる物語である。もう一つは、第二幕で、戦後の山間地農業に共産的集団経営・多角経営の導入を推奨するというイデオロギー的かつ実利的側面である。特に改訂された台本版では、その手立が詳細に解説されている。かつて『ゴー・ストップ』（中央公論社、一九三〇年）で、通俗的ストーリーに乗せてストライキの実践法を大衆に分かりやすく説いた貴司山治らしい配慮である。しかし、木澤村で農村を集団化・多角化することには、いったいほどの現実性があったのだろうか。初出版・台本版ともに、アンゴラ兎の飼育に希望を託す姿が描かれている。たしかにアンゴラ兎は戦時中から農家の副業として注目を集め、戦後には投機的と呼べるほどに、人気が高まっていた。⁽¹⁹⁾しかし、

こうした改革案は、未来へと希望をつなぐ演出であるものの、ことはそう単純ではなかっただろう。

また、よりわけ不可解であるのは、清一が帰国するやいなや、出迎えた共産党新潟県委員会の桜井に、満洲やロシアに再度渡り、「労働でつぐないをする」「わしらは志願する決心です」(87)と、新たな「決心」を語ったことである。「満蒙開拓」の理想は「夢」であって、現実には「満洲人」から土地を奪い彼らを使役したにすぎなかったという現実認識が示されて、清一の思いは切実であるものの、論理は空転している。その上、台本版の末尾では、次のようにさらなる「内地開拓」への連続が示唆されている。

東谷 いや、巻頭は、要る。清一さは新しい巻頭だがだんげ
武石 そうだがだんげ。

清一 あは、、、、 そうではない。その証拠にわしは三年くらい今いつたとおりの農業改良をみなにおしえたら、あとは家を武にゆづつて、村を出て行くからな――

きくえ 村を出て行くつて？ どこさ行く。清ちや！

清一（人々に向かつて）いま日本では国営開拓というこ
とがはじまつているんだ。日本中の方々の山の中に
十五万戸くらいの開拓者がはいつてゐる。わしはこの
村の土地のないもんをさそつて、長野県ざいか、群

馬県附近の山の中へはいつて、新しい畑と村をつくるつもりなんだ。

清一たちのかつての渡満は、村を救うためだった。帰国後の再渡満の希望は満洲の民に「つぐない」するためである。さらに農地改革後の木澤村への帰村とそこでの新農法の実践は村を救い、死者につぐなうためである。最後に、右の「国営開拓」参加は、「土地のないもん」を救うためである。第一幕に接合された「雷新田」は、「救村」と「贖罪」が交互に繰り返される物語であった。

ところで貴司山治も丹波の山中で関わった内地開拓は、事変
下で食料増産を主な目的として一九四一年三月に開始され、や
がて大戦末期の疎開者対策へとシフトしたものであった。それ
が戦後には、大陸からの「引揚開拓農民」の受け皿へと再編さ
れていた。安岡健一によれば、「引揚開拓農民」の多くは「送
出元である「地元」へと戻ることができず、新たな地へ向かわ
ねばならなかった」のであり、引き揚げを経て、「再び国策と
しての開拓政策に則って入植」していた。²⁰右の引用で、「長野
県さかいか、群馬県附近の山」に入るとあるのは、かつて『青
人草』で舞台となった浅間山麓あたりを想起させるが、ここに
も戦後、「引揚開拓農民」が入植している。疎開者や引揚者を
中心とする農民共同体に合流しようとする清一の姿は、かつて
満洲へと「送出」された農民たちにとどこまでも寄り添うことを

意味するだろう。〈開拓Ⅱ転向〉の論理の実践としての「開拓」

の物語は、〈開拓Ⅱ救済〉の希求によって上書きされたのである。ただし、前章で述べたように、初出版の分かりにくさにこだわるなら、このテクストが、単に〈救済〉を希求するものと捉えることはできない。むしろ、〈救済〉の希求さえ「開拓」からは逃れられない物語としても現れているのではないだろうか。戦時下に起動された〈開拓〉というプログラムは、敗戦など意に介さないかのように、その運動を止めないのである。それは、満蒙開拓から内地開拓へと連続する農民たちの姿に重なる。テクストは、満蒙開拓の過ちに気付きながら、それでもなお、あるいはそれゆえに、「開拓」に励むことを奨励している。しかしその「つぐない」としての「開拓」は、誰のいかなる行為の代償だというのか。清一たちが「満洲」の曠野で見た（あるいは関与した）出来事はどこにも語られない。もしかすると、物語は〈開拓Ⅱ転向〉にともなう日本人のトラウマのような記憶を〈救済〉することに向かっているのかもしれないが、その真偽も不明のままなのである。

言説空間としての〈木澤村〉では、批判は協力へと横滑りし、開拓者の末裔としての矜持は「時局」に包摂されていった。批判と協力が、選択可能な異なる二つの立場だと考えるのは「戦後」的な思い込みではない。その上、縁起帳に記された神話的な入植譚も、清一たちの満蒙開拓も、出来事の外形だけしか示されず、その核心部ではいったい何があったのかを私たちは

知ることができない。「雷新田」（とりわけ初出版）は、急激な言説空間の変容の中で、そうした不確定性そのものを顕わにする歴史の開口部Ⅱ裂け目なのである。一方、台本版は、そうした不明瞭さ・分かりにくさを残しつつも、戦後の観客に了解しやすいよう綻びを繕ったものであった。

いまだ分節化されない土地を、人間が利用可能な状態へと改編しつつ、原野の風景を消し去るのが「開拓」だとすれば、言説行為としての〈開拓〉もまた、起源の記憶を消し去りつつ、読者に了解可能な言説空間を準備するだろう。それは戦後を再出発するために必要なことであつたといえ、転向以後の苦難の記憶（無数の人々の記憶たち）を上書きしていくことでもあつた。ふもとの開拓地を失い、天空に取り残された「雷新田」は、希望の象徴である以上に、今まさに喪失されつつある〈記憶たち〉のかすかな残像だったのである。

注

（１）本誌前号の拙稿「計画された国土、構成された未来——貴司山治『青人草』と〈東亜協同体の論理〉」を参照されたい。

（２）貴司山治研究会編『貴司山治全日記DVD版』（不二出版、二〇一一年）所収。「開拓」のアナロジーによって作家主体の再確立が希求されている点は興味深い。以下、貴司山治の「日記」からの引用はすべてこのDVD版に拠る。

（３）満蒙開拓は、一九三二年の「満洲国」建設に伴って始まった。当初は在郷軍人を中心とする武装移民であつたが、一九三七年以降本格化し、大規模な分村移民が行われた。同じ三十七年には、「満

蒙開拓青少年義勇軍」の設立が閣議決定し、翌年から、十五歳から十八歳の少年たちが茨城県内原町にあった「内原訓練所」で数ヶ月間の訓練を受けた後に送出された。白取道博『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』（北海道大学出版会、二〇〇八年）によれば、一九三八年から一九四五年までの間に、八万六五三〇人が送出されている。清一たちはこの内原訓練所に向けて出発するのである。

(4) 台本版は公刊されていないため、貴司山治旧蔵本を息子伊藤純氏に閲覧させていただいた。表紙には「昭和二十四年八月二十一日作成」とある。台本版でも大筋は同じであるが、国雄の妹「きくえ」が新たに登場し、女郎として売られて行く彼女を共産党員の青年「桜井」が弁舌によって救助するエピソードが付け加えられている。総じていえば、共産主義的な価値の賞揚と、戦前権力の本質暴露といった要素が強調されたものとなっている。

(5) 夏目漱石の弟子としても著名な松岡譲は、一八九一年生まれで貴司よりも八歳年長であった。「日記」によれば、貴司は一九二五年一月に、京都鹿ヶ谷に住んでいた松岡を初めて訪問して以来、何度も訪れ、妻筆子からも手料理を振る舞われている。

(6) 貴司山治『雷新田』（『テアトロ』一九四九年九月）。以下、断りない限り本文からの引用はすべて初出に拠り、掲載誌のページ数を付すのみとする。

(7) 貴司山治『尊し、女丈夫の心事 白木の箱で迎えた三人の愛児（日本の母7新潟県星野とよさん）』（『読売報知新聞』一九四二年九月十五日）。のち『日本の母』収録にあたり「巻頭の妻の心 新潟県・星野とよさん」と改題。

(8) 日本文学報国会編『日本の母』（春陽堂書店、一九四三年）一一二頁。引用は復刻版『帝国』戦争と文学25日本の母他一篇（ゆまに書房、二〇〇五年）による。

(9) 移動演劇関連の編著に『移動演劇の研究』（日本電報通信社出版

部、一九四三年）がある。伊藤嘉朔は貴司山治原作『坂本龍馬の妻』（金子洋文演出、新橋演舞場、一九四〇年八月）の装置を担当し、『維新前夜』の装幀も手がけている。

(10) 長春（旧新京）での苦難の一年の間には、命を落とした開拓民たちの墓標削りまでしたという。河村久子『満洲で聴いた玉音放送』『劇団文化座五十年史』（劇団文化座、一九九二年）所収。

(11) 実際、「その人を知らず」の大阪公演は不入りで、その要因は宣伝の失敗などの「複合作用」とされている。同前、七九頁。

(12) 大豆生田稔「戦時食糧問題の発生——東アジア主要食糧農産物流通の変貌」『岩波講座 近代日本と植民地』第五巻（岩波書店、一九九三年）一八一頁（表2）。

(13) 前掲『満蒙開拓青少年義勇軍史研究』一六三頁（表33）。

(14) 同前、一三二頁（表26）。

(15) 同前、一六五頁。

(16) 同前、一七〇頁。

(17) 加藤完治『日本農村教育』（東洋図書株式会社、一九三四年）では、「農村と云ふものは自分と離るべからざる関係にある所の大きな命」であり、「日本精神」のもとでの村民の「一致協力」が必要とされている（一一七頁）。

(18) 貴司山治『雷新田』余談（本文前掲）によれば、劇団側から改訂の要望があった。貴司もそれに賛同して改訂に協力したので、台本を「定本」とすると宣言されている。

(19) たとえば、『朝日新聞』朝刊（一九四九年四月七日、二頁）の写真付き記事「ふえる「アンゴラ」」には、「輸出のホープ」アンゴラうさぎは終戦時には全国で六万頭しかいなかったが現在四十万頭、年内には百万頭を突破という盛況ぶり」とある。

(20) 安岡健一『他者』たちの農業史——在日朝鮮人・疎開者・開拓農民・海外移民』（京都大学学術出版会、二〇一四年）一七六頁。